

長野県松本市

SAWAMURA

沢村遺跡

—発掘調査報告書—



2010.3

松本市教育委員会

例 言

- 1 本書は、平成20年5月7日～6月17日に実施された松本市沢村1丁目1724番1、1724番5、1725番に所在する沢村遺跡第1次発掘調査の報告書である。
- 2 本調査は、城北地区防災緑地整備事業に伴う緊急発掘調査であり、松本市教育委員会が発掘調査を実施し、本書の作成を行なったものである。
- 3 本書の執筆は、Ⅲ章3節(3)：原田健司、その他を福沢佳典が行なった。
- 4 本書作成にあたっての作業分担は、以下のとおりである。
遺物洗浄・注記：百瀬二三子 土器接合・復元：白鳥文彦、前沢里江
土器実測・トレース・拓本：竹内直美、中瀬温子 石器実測・トレース：荒井留美子、原田健司
鉄器処理・実測・トレース：片山祐介、洞沢文江 遺物図版作成：福沢佳典
遺構図トレース：荒井留美子、福沢佳典 総括・編集：福沢佳典
- 5 本書で使用した遺構の略称は以下のとおりである。
第○号住居址→○住、土坑○→土○、ピット○→P○
遺構図面上でのピットの番号は、単独のものを「P1」、住居址付属のものを「P1」のように記し区別した。
- 6 遺構・遺物の記述で用いた古代の上器の種別・器種・時期区分等は、次の文献による。
(財)長野県埋蔵文化財センター 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』
- 7 本調査で得られた出土遺物および調査の記録類は松本市教育委員会が保管し、松本市立考古博物館(〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189)に収蔵している。



第1図 調査地の位置 (S=1/25,000)

目次

I 調査の経緯	
1. 調査の経過	3
2. 調査体制	3
II 遺跡の環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
III 調査成果	
1. 調査の方法と概要	6
2. 遺構	8
3. 遺物	12
IV 総括	20

I 調査の経緯

1. 調査の経過

今回、松本市沢村1丁目1724番1ほかに城北地区防災緑地整備事業が計画された。事業予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である沢村遺跡に該当するため、松本市教育委員会が平成19年12月13日に試掘確認調査を行なったところ、予定地内に埋蔵文化財が残存していることが判明した。工事により当該文化財が破壊される恐れが生じたため、事業担当課と保護について協議を行ない、発掘調査を実施して記録保存を図ることとした。発掘調査は松本市教育委員会が行なった。なお、平成20年4月28日に文化財保護法第94条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書が長野県教育委員会に提出され、同年5月2日、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知により、長野県教育委員会から発掘調査の指示を受けている。

現地での発掘調査は、平成20年5月7日～6月17日にかけて行ない、6月14日に現地説明会を実施、6月18日、長野県教育委員会に終了報告書を提出し完了した。また同日、松本警察署に埋蔵物発見届を提出、6月27日に長野県教育委員会教育長から埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。次いで、平成21年10月5日に長野県教育委員会に出土品の譲与申請を行ない、10月9日に長野県教育委員会教育長より松本市教育委員会教育長宛に譲与の通知を受けた。

出土遺物および記録類の整理作業は松本市立考古博物館において実施し、平成22年3月31日に発掘調査報告書（本書）を刊行することで完了した。

2. 調査体制

調査団長 伊藤 光（松本市教育長）

調査担当 竹原 学（文化財課 主査）、福沢佳典（同 嘱託）、吉井 理（同 嘱託）

調査員 宮嶋洋一、森 義直

協力者 荒井留美子、石川一男、今井太成、入山正男、清水陽子、下条ちか子、白鳥彦彦、竹内直美、中澤温子、洞沢文江、前沢里江、待井敏夫、百瀬二三子

事務局 松本市教育委員会 教育部 文化財課

小穴定利（課長）、大竹永明（埋蔵文化財担当係長）、直井雅尚（同 主査）、

関沢 聡（同 主査～平成21年3月）、小山高志（同 主任）、

櫻井 了（同 主事～平成21年3月）、柳澤希歩（同 嘱託）



●印：調査地点 No.：松本市遺跡台帳記載の遺跡番号

16 トウコン原遺跡	142 神沢遺跡	143 峰ノ平遺跡	144 狐塚遺跡	145 旧射の場西遺跡
146 元原遺跡	147 沢村北遺跡	148 沢村遺跡	149 放光寺遺跡	150 犬ヶ城址
151 城山腰遺跡	152 宮瀧二つ塚遺跡	153 宮瀧本村遺跡	154 鎌ヶ崎遺跡	155 田町遺跡
156 女鳥羽川遺跡	157 松本城下町跡	158 丸の内遺跡	159 大名町遺跡	494 松本城跡
496 岡の宮遺跡	498 伊勢町遺跡	499 土居尻遺跡	500 片端遺跡	510 堂町遺跡
513 水汲遺跡				
95 水汲2号古墳	96 水汲3号古墳	180 鳥居山古墳	181 宮瀧二つ塚1号古墳	182 宮瀧二つ塚2号古墳
183 宮瀧1号古墳	184 開き松古墳	185 櫻頭塚古墳	186 勢多賀神社裏古墳	479 峰ノ平1号古墳

第2図 周辺遺跡 (S=1/15,000)

II 遺跡の環境

1. 地理的環境

沢村遺跡は沢村1丁目に所在し、城山から芥子坊主山に延びる城山丘陵の東麓で、女鳥羽川により形成された段丘上に立地する。調査地点の東西を大門沢川と西大門沢川が流れる微高地状を呈しており、緩やかに南東に傾斜する。調査地の標高は約607～609mである。

調査地点付近は、過去において古女鳥羽川の本流または大きな支流が岡田町の西、筑摩山地の山麓を流れており、本遺跡の東の第2段丘崖の裾に沿って南流し、その間筑摩山地からは幾筋もの沢が合流していた。その沢の一つとして調査地の西を西大門沢川が流れ、旧開智学校付近で古女鳥羽川と合流していたものと推定される。大門沢川や、そこから女鳥羽川までの間に南から西へと弧状に幾筋か繰り返す微高地と谷状の地形は、女鳥羽川の旧流路の痕跡といわれている。この古女鳥羽川は大洪水により流路を変え、岡田町の東を流れるに至ったと考えられ、その時期を巡ってはさまざまな見方がある。最終的に現在の位置に河道が定まったのは、戦国時代末期の松本城形成期において大規模な人為的変更が加えられた結果によるものといわれている。

一帯は古くから桑畑や果樹園として利用されてきたが、近年は宅地化が進み、市街化が著しい地区である。

2. 歴史的環境

本遺跡が立地する第2段丘面の南端部周辺の遺跡について概要を述べる。遺跡名はゴシックで表示し「遺跡」は省略して記載した。旧石器時代の遺跡は少なく、岡田神社裏、塩倉池、放光寺などでいくつか表探資料があるが、詳細は不明である。

縄紋時代になると中期に遺跡数が増加する。今回の調査地周辺には、神沢、峰ノ平、放光寺、狐塚、トウコン原、旧射的場西、元原、城山腰などの遺跡が広がっている。いずれも遺構に伴うものでないが、旧射的場西で早期末から後期前葉にかけての土器や石鏃、滑石製の飾り玉など、元原で中期後半の土器が出土している。

弥生時代になると、城山とその麓の大門沢川に沿って遺跡が分布しているようである。元原、沢村北、蟻ヶ崎などは本遺跡と同じく沢に沿って分布する遺跡である。城山では、放光寺、城山腰、宮測二つ塚、宮測本村などの遺跡が広がる。城山腰では中～後期の土器とともに太形始刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁、磨製石鏃、石剣、細形管玉が出土している。宮測二つ塚、宮測本村では弥生中期後半～後期末にかけての住居址が発見され、銅鐸の鈕の一部が出土している。本遺跡でも弥生時代後期の扁平片刃石斧や磨製石戈などが出土しており、弥生時代集落の展開が予想される。

古墳時代に入ると丘陵地を中心に多くの古墳が築造されるようになる。岡田、水汲、城山を中心に分布し、城山では丘陵中腹から山麓にかけて古墳が築造されている。特に、宮測1号古墳は発掘調査により5世紀後半～末葉の築造であることが分かっている。その他、副葬品が判明しているものとして、直刀・剣・鉾・玉類・石製刀子が出土した鏡頭塚古墳、石剣が出土した勢多賀神社裏古墳、眉庇付冑が出土した開き松古墳がある。

奈良・平安時代においても岡田から城山にかけて多数の遺跡が広がる。中でも城山腰から瓦塔の屋蓋隅上部分が出土しているが、出土状態など詳細は不明である。さらに、鰐口と磬も出土しており、銘文のある鰐口としては日本最古のものとして、磬とともに国の重要文化財に指定されている。

調査地付近では、旧射的場西、蟻ヶ崎で発掘調査がされており、奈良から平安時代前期の集落が確認されている。中でも蟻ヶ崎は調査地に近接するため、注目すべき遺跡であろう。

III 調査成果

1. 調査の方法と概要

(1) 調査範囲

今回の調査地点は、松本市沢村1丁目1724番1、1724番5、1725番にあたり、沢村遺跡に該当する。城北地区防災緑地整備事業の計画にあたり試掘確認調査を実施したところ、一部に奈良～平安時代の遺構および遺物が残存していることが判明した。そのため、遺構が破壊される防火水槽埋設工事の掘削が及ぶ範囲を調査範囲とし、発掘調査を実施した。調査面積は149.3㎡である。

(2) 調査方法

発掘調査は、大型建設用機械バックホウで表土から遺構検出面直上まで掘り下げ、それ以降は人力による遺構検出作業を行なった。その結果、主に調査区の北半に遺構を検出し、各遺構ごとに土層観察用のベルトなどを残し掘削を行なった。遺構の番号は種類ごと検出順に付した。

その後、バックホウにより調査区を埋め戻して調査を終了した。

(3) 測量方法

平面測量は、調査区東に既設の測量用基準点 X = 997.695、Y = 997.425 を原点 NS 0、EW 0 とし、原点と同 X = 1000.941、Y = 1014.565 を基に、調査区内に任意の3m毎のグリッドを設定した。また、原点 NS 0、EW 0 は最寄りの国家座標既知点から値（世界測地系）を導き、X = 27417.079、Y = -47678.068 の値を得ている。

標高については、調査区南西に水準点（BM = 609.000 m）を設定した。

遺構図、遺物出土状況図の測量は簡易測り方測量で行ない、遺構配置図は S = 1/100、土層図、遺物出土状況図、遺構完掘図は S = 1/10 または 1/20 で作成した。

(4) 基本土層

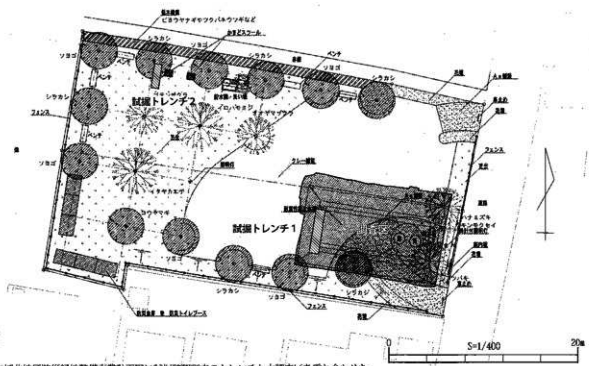
既に述べたように、今回の調査地点は女鳥羽川により形成された第2段丘面に立地する。この段丘面の土層は女鳥羽川の堆積物である灰褐色の砂礫層の上に、傾動してできた西部山地から新第三紀層の風化物・古女鳥羽川の堆積物・さらにその上に載っているロームなどが崖錐となって移動混入し複雑な堆積の様相を呈している。

調査区内においても同様で、東側は黄褐色砂質土層、中央は砂礫層が遺構検出面に露出している。西側は東側と同様に黄褐色砂質土層が主体であるが、褐色細砂層や礫層が複雑に堆積する。中央の砂礫層は平安時代後半の第1号住居址に切られるため、11世紀後半以前に堆積したものである。

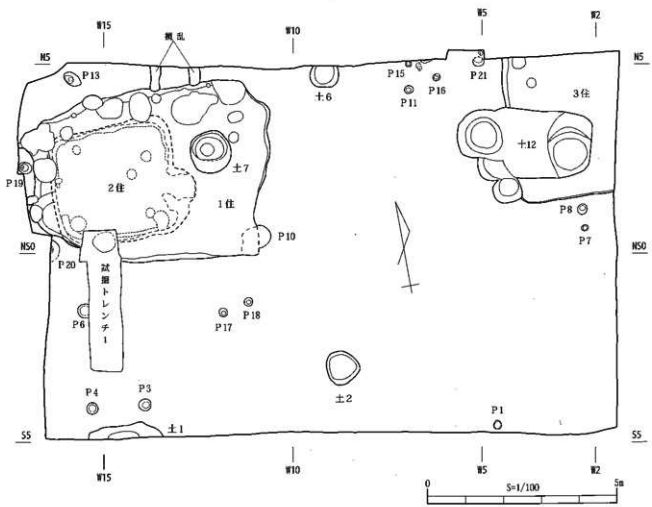
過去において古女鳥羽川は城山の麓を流れており、大洪水により多量の土砂が押し出され、流路を始め岡田地区の南部まで厚く堆積したため、流路は稲倉付近から徐々に東へ首を振り、現在の流路に至ったと今日までの調査からいわれている。その時期についてはまだいくつか説があり不明であるが、調査区中央の砂礫層も古女鳥羽川の洪水に伴うものと推測される。女鳥羽川が東に流路を変える原因となった洪水層とは断定できず、本流が西へ移動した後の時期のものである可能性も十分ありうる。

調査区内は、地表面から深さ約0.50mまで碎石層など現代の造成土および耕作土が堆積し、遺構検出面に至る。斜面上方の北側では、深さ約0.20mで遺構面に達する場所もある。

上述のように、遺構が掘り込まれる地山層は砂礫層、黄褐色砂質土層など多様である。



※城北地区防災緑地整備事業計画内に試掘確認調査のトレンチと本調査区を兼ね合わせた



第3図 調査位置図・遺構配置図

2. 遺構

(1) 概要

竪穴住居址3軒、土坑5基、ビット16基を検出した。住居址は調査区の北半のみに分布し、調査区中央は古女鳥羽川と推測される洪水性砂礫層が堆積するため、遺構の分布は少ない。

(2) 竪穴住居址

第1号住居址(第4図)

調査区の北西に位置し、現代の攪乱および土7に切られる。試掘確認調査時にトレンチ1で検出し、土師器盤Bの脚部が出土している。規模は6.5×4.6m、深さは0.55mで、不整形長方形を呈する。覆土は主に黒褐～暗褐色砂質土で、東から南の壁際にかけては礫が多量混入する覆土が堆積する。また、住居の中央部分は下に2住が埋没しているためか、黄褐色地山塊が多量混入する黒褐色土を貼床状に薄く丁寧に施している。その周囲の壁際にかけては地山削り出しで床面としており、顕著な硬化面は確認できない。壁は、斜面上方の北側では約0.20mで緩やかに立ち上がるが、斜面下方の南側、特に砂礫層を切る南東部では明確な壁の立ち上がりは確認できない。

カマドは北西隅に検出された。遺構検出時に礫集中を確認し掘削を行なったところ、ほとんどの礫が覆土中に含まれるもので、カマドを破棄した痕跡である。カマドの構築材と考えられる被熱礫はカマド脇のP13の底面からも出土し、広範囲に散布している。また、カマド前から正位の状態で完形の土師器杯A3点(第6図8～10)と刀子(第9図)が出土しており、カマドを破棄する際に意図的に置かれたものと考えられる。カマドの火床面は床面よりやや低いレベルに焼土を確認し、袖石のレベルとも矛盾はない。しかし、火床面より下にも黒褐色土が堆積し、深さ0.26mの土坑となり、底面には炭化物が集中するくぼみが見られた。このカマド下の土坑は均質の土で埋まっており、カマド構築時に掘り下げたものと考えられるが性格は不明である。また、カマドの両袖部分に焼土・炭化物が混入するビットがある。南側のものはP13に続く横穴状で、通気口のようなものであろうか。

住居内ビットは14基検出されたが、ほとんどが浅く明確な柱穴はない。住居の北側に集中し、壁際にも小さなビットが並ぶ。試掘トレンチ1で確認されたP8は床面からの深さで0.24mほどであるが、位置関係から柱穴の可能性はある。カマド脇のP13は焼土・炭化物と被熱礫が混入する覆土で、甕D(第6図33)が出土している。

遺物は黒色土器A杯A・椀、土師器杯A・盤B・甕B・羽釜・甕D、須恵器杯A・小型壺・甕、灰釉陶器椀が出土している。上述の完形の土師器杯のほかは床面からの出土は少ない。これらの出土遺物から古代土器編年の14期、11世紀後半に帰属すると考えられる。

第2号住居址(第5図)

1住の床面で検出し、1住の範囲内にほぼおさまる人れ子状である。規模は3.7×3.2m、深さは0.22mで、隅丸方形を呈する。覆土は主に黄褐色地山塊が多量混入する黒～黒褐色砂質土である。貼床は黄褐色地山塊が多量混入する黒褐色土で、北半に明瞭に残存している。壁はほぼ垂直に立ち上り、壁高は0.24～0.32mを測る。カマドは東壁のやや南寄り検出された。覆土には多量の土器片と焼土・炭化物が混入する。火床面直上には炭化物が集中しており、その下に明瞭に被熱した火床面を検出した。覆土に被熱礫がほとんど混じらず、袖石や支柱石と考えられる礫をそれぞれ1点検出した。

住居内ビットは7基検出し、位置関係からP1～4が柱穴と考えられるが、深さは一定ではない。P6はカマド脇の浅いビットであるが、覆土に焼土・炭化物が多量混入し、ほぼ完形の黒色土器A杯A(第7図35)が伏せた状態で出土した。周溝は幅0.10～0.30m、深さ0.40～0.80mで壁下に巡る。西側の一部

は周溝が途切れており、カマドとの位置関係から住居の入口であろう。

遺物は主にカマド内からの出土で、黒色土器A杯A、土師器杯A・杯C・鉢・甕B・小型甕B、須恵器杯B・高盤・短頸壺が出土している。特徴的なものとして、床面から片口の土師器鉢（第7図41）、P6から土師器杯C（第7図39）が出土している。これらの出土遺物から古代土器編年の5期、9世紀前後に帰属すると考えられる。

第3号住居址（第5図）

調査区の北東に位置し、住居の東側と北側は調査区外に続く。弥生包含層を切り、土12に切られる。カマドは検出されなかった。規模は3.8×3.1m以上、深さは0.57mで、隅丸方形と推測される。覆土は黄褐色地山塊が少量混入する暗褐色砂質土で、10～20cm大の礫が多量混入する。この礫は主に覆土の下層に集中し、面的にも住居全体に広がっている。住居廃棄の際に一時に混入したものと考えられる。また、後述する弥生包含層が本住居址周辺にのみ残存していたことと関係してか、1・2住と比べ覆土に弥生土器が多量混入する。

住居内ピットは住居の西壁寄りに2基検出したが、深さ0.05～0.11mと浅く柱穴とは考えにくい。

遺物は覆土に弥生土器・石器が多量混入するほか、覆土下層の礫に混ざって土師器甕B、須恵器杯蓋B・杯A・杯Bが出土している。これらの出土遺物から2住と同時期の5期、9世紀前後に帰属すると考えられる。

(3) 土坑（第5図）

土坑は5基検出した。調査段階で土坑3～5は欠番とし、整理段階で土坑8～11、13は近世土坑群として土坑12に統合した。

土1は底面から土師器杯Aが出土し、1住と同時期の14期と考えられる。南側は調査区外に続くが直径2m以上の円形を呈すると推測される。土7は近・現代の糞埋設坑であり、1住覆土を切る。覆土より灰釉陶器碗片、近世陶磁器片が出土している。

土12は検出段階では土8～13の6基の土坑の切り合いと考えられたが、周囲に粘土を貼り巡らせた明確な円形プランを確認したため、近世の木製桶などの埋設坑と判断した。検出時に遺構Noを付したもののうちでは土8～11が桶の痕跡、土13が桶を固定する灰色粘土層、土12はこれらの掘り方が集合したものである。17～19世紀後半の陶磁器が出土している。

(4) ピット（第5図）

ピットは16基検出した。調査段階でP2・5・9・12・14を欠番とした。いずれも深さ0.06～0.35mの浅いピットで、建物を構成するような並びもみられない。P21は弥生包含層下で検出し、弥生土器片が集中する浅いくぼみである。それ以外は、出土遺物が少なく帰属時期は不明である。

(5) 弥生包含層

調査区の北東部、3住の周囲に残存していた。調査区北・東壁の観察では厚さ0.10～0.25m、遺物の遺存状態は良好で、遺物集中箇所もみられる。住居址などの明確な遺構は検出できなかった。出土土器は弥生時代中期後半の粟林式に相当し、土器片加工円盤やミニチュア土器もみられる。

第1表 竪穴住居址一覧表

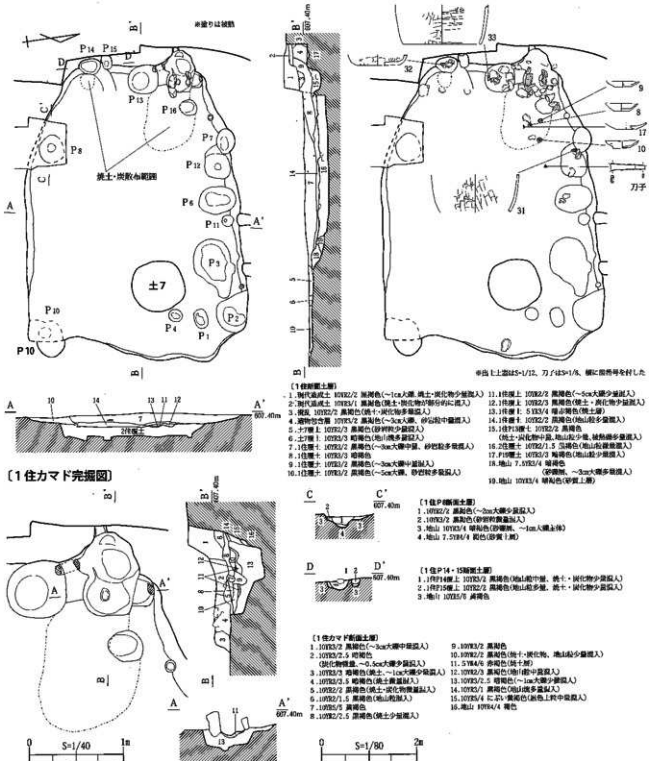
住居No	平面形	規模				主軸方向	カマド形態	時期	備考
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	床面積(m ²)				
1	不整形長方形	6.5	4.6	0.55	22.9	N-83°-W	石組、北西隅	14期、11世紀後半	
2	隅丸方形	3.7	3.2	0.22	8.3	N-89°-E	粘土か、東壁	5期、9世紀前後	1住の床面で入れ子坑に検出
3	隅丸方形か	<3.8>	<3.1>	0.57	<10.2>	N-5°-E	不明	5期、9世紀前後	土12に切られる

※<>内の数値は切り合い等で全長が測れないものの実寸値。主軸方向は北からカマドの方向、3住は長軸方向を計測。深さは最深度で計測。

第2表 土坑一覧表

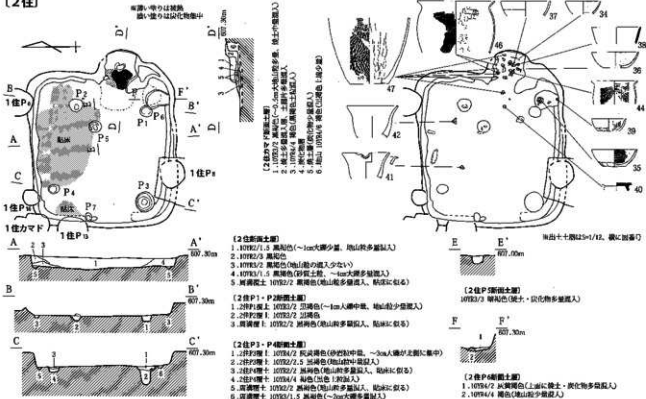
土坑No	平面形	規模			主軸方向	出土遺物	時期	備考
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
1	円形か	<2.0>	<0.4>	0.52	N-84°-W	土師甕A	14期, 11世紀後半	
2	円形	0.9	0.9	0.24	N-35°-W	土師甕		
6	円形	<0.75>	<0.56>	0.16	N-12°-E	弥生, 陶磁器		自然地形の可能性もあり
7	円形	1.1	1.1	0.84	N-7°-W	灰椀, 近世陶磁	近代	遺埋土坑
12	不整形円形	3.55	2.6	0.87	N-74°-W	近世陶磁器	近世	土8~13を一括して土12とした。土8~11は埋没桶で, 土13は桶を固定した粘土層, 土12は溝り方にある。

※ <> 内の数値は全長が測れないもの実寸値

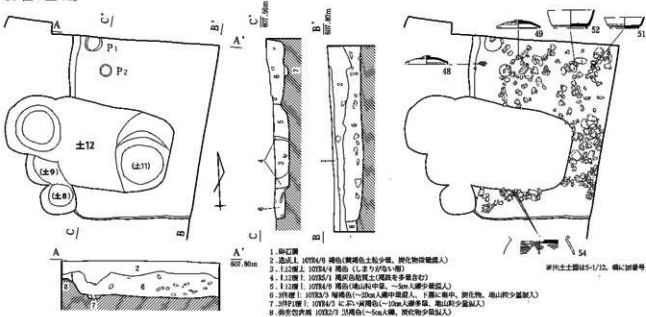


第4図 第1号住居址

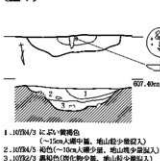
[2住]



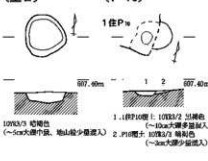
[3住・土12]



[土1]



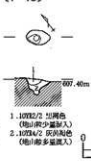
[土2]



[P 10]



[P 13]



[P 19]



[P 21]



第5図 第2・3号住居址、土坑・ピット

3. 遺物

(1) 土器・陶磁器 (第6・7図、第3表)

今回の調査では、遺構から奈良～平安時代の土器、近世陶磁器が出土している。弥生土器は住居址覆土からの出土もあるが、明らかな混入品であるため一括して別項で扱うこととした。

ア. 古代～近世の土器

主に住居址覆土と、一部土坑覆土・検出面から出土し、このうち71点を図化提示した。奈良～平安時代の土器は、黒色土器A、土師器、須恵器、灰釉陶器、近世陶磁器は碗類、皿類、鉢類が出土している。土器の器種・器形分類と土器群の年代観は、例言にあげた文献に準拠した。遺物の大半を占める古代の土器は、住居址の時期である5期の9世紀前後と14期の11世紀後半にまとまる。なお、出土土器の総重量は弥生土器を含めた値である。

第1号住居址 (第6図)

総重量5,068gが出土し、そのうち33点を図示した。黒色土器A杯A・椀、土師器杯A・盤B・甕B・羽釜・甕D、須恵器杯A・小型甕・灰釉陶器椀から成る。土師器杯Aの口径が9.8～10.5cm、器高が1.95～2.5cmにまとまるため、14期に帰属すると考えられる。そのため、3、4、23、27～29は混入の可能性が高い。土師器甕Bは外面の刷毛目を頸部まで施し、口縁部が直線的に長く立つ。口縁部内面にも掻き目は施されない。体部内面にも横刷毛目が認められるため5期以前の可能性がある。

土師器杯Aのうち8～10はカマド前出土で、いずれも器形の歪みが著しい。また、内外面にススやタールが付着し、10は口縁部に灯芯痕が確認できる。17は皿A1であろう。18・19は土師器椀としたが、内面に弱い磨きを確認できる。20は盤Aで、内面に炭化物が付着する。図化できなかったが、脚部も出土している。端部の形態は面取りが施され、須恵器甕類の口縁部形態に似る。24は灰釉陶器椀で、断面四角形の厚手の貼り付け高台、底部の回転糸切り痕は撫で消している。内底面に使用痕が認められる。羽釜・甕D(30～33)はカマドがある北西部から出土している。石英、雲母片を多く含む粗い胎土で、内外面に篋状工具による粗い撫でを施す。

第2号住居址 (第7図34～47)

総重量3,435gが出土し、そのうち14点を図示した。黒色土器A杯A、土師器杯A・杯C・鉢・甕B・小型甕B、須恵器杯B・高盤・短頸甕から成る。2住はP6底面出土の35や須恵器杯B・杯蓋Bの形態から5期に帰属する。

35・36は黒色土器杯Aで、35は外面底部に手持ち篋削りを施す。内面の磨きも丁寧で、放射状に縦方向磨きをした後、上半を横方向に磨いている。39は土師器杯Cで、いわゆる甲斐型杯である。外面体部下半に手持ち篋削りを施し、内面に放射状に磨きを施す。内面暗文状磨きの省略化が進んでおり、外面には磨きを確認できない。41・42は土師器鉢である。体部上半で緩く屈曲し口縁部に向け外方へ開く。口縁端部は丸くおさめるが41は片口であり、42も同様の形態である可能性が高い。下半は器壁が厚くなっており、緩やかに丸く底部に向かうようである。胎土は密で他の土師器とは異なる。44は小型甕Bで、内外面刷毛目調整を施す。甕B(45～47)は薄手で焼成堅緻であるが、口縁部が長く内面に掻き目は施されない。端部を面取りするもの(46)などがあり、やや古い要素を残すものか。

第3号住居址 (第7図48～54)

総重量6,260gが出土し、そのうち7点を図示した。土師器甕B、須恵器杯蓋B・杯A・杯Bより成る。これらの遺物より2住と同時期の5期、9世紀前後と考えられる。

48・49の須恵器杯蓋Bは頂部に丁寧に回転篋削りを施し、51・52の須恵器杯Bは、ⅢとⅣの2法量が

確認できる。53は土師器甕で、外面は叩き後軽い撫で調整を施している。

土坑1 (第7図55)

総重量98gが出土し、そのうち土師器杯A 1点を図示した。内面に朱が付着する。14期に帰属する。

土坑7 (第7図56・57)

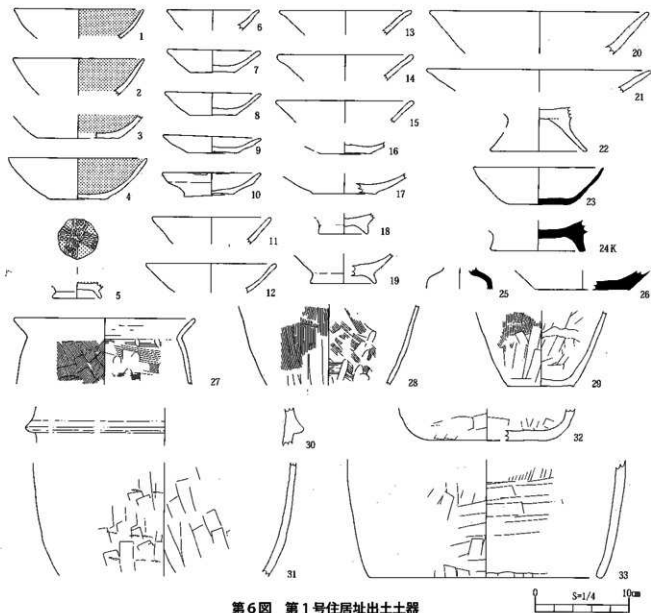
総重量174gが出土し、そのうち2点を図示した。56は灰軸陶器椀、57は瀬戸・美濃産の磁器碗で、19世紀前半である。いずれも混入品と考えられる。

土坑12 (第7図58～68)

近世土坑群一括で総重量1,172gが出土し、そのうち11点を図示した。瀬戸・美濃産が多く、陶胎染付も確認できる。17世紀代から19世紀後半以降まで時期幅があり、被熱しているものが多い。19世紀後半以降に一括して廃棄されたものであろう。

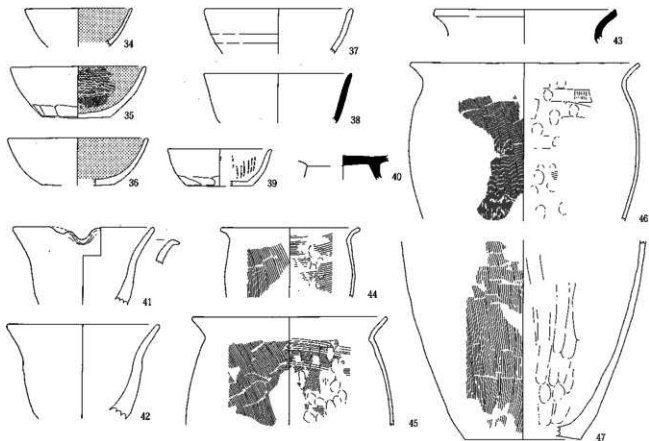
検出面 (第7図69～71)

総重量1,010gが出土し、そのうち3点を図化した。69は器高が4.7cmと深めの土師器杯Aである。70は灰軸陶器である。焼成がやや不良であるが施釉されており、口径が小さいため段皿の特殊器形と考えられる。内面には朱が付着し使用痕が確認できる。71は瀬戸・美濃産の磁器小碗で、19世紀初頭と考えられる。

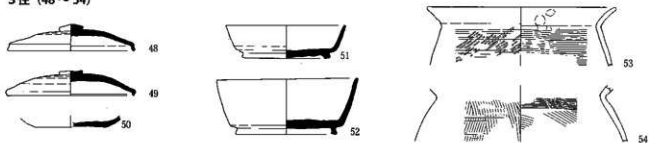


第6図 第1号住居址出土土器

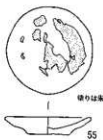
2住 (34~47)



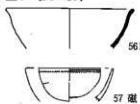
3住 (48~54)



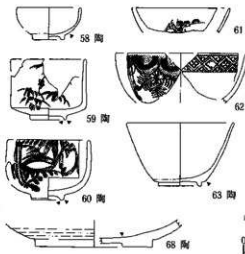
土1 (55)



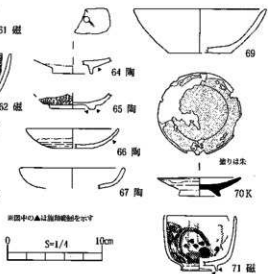
土7 (56・57)



土12 (58~68)



検出面 (69~71)



第7図 第2・3号住居址、土坑・ピット出土土器・陶磁器

イ. 弥生土器・土製品 (第8図)

主に弥生包含層、3住覆土から出土している。弥生土器は8点を図化提示し、18点を拓影で提示した。壺形土器、甕形土器があり、土製品としてミニチュア土器・土器片加工円盤がある。

壺形土器 (第8図 72～83)

全体を把握できるものではなく、口縁部形態が判明するものもない。紋様帯は頸部、胴部上位、胴部中位(下位)に認められ、

頸部: 縄紋+竇描横線 (81・82)

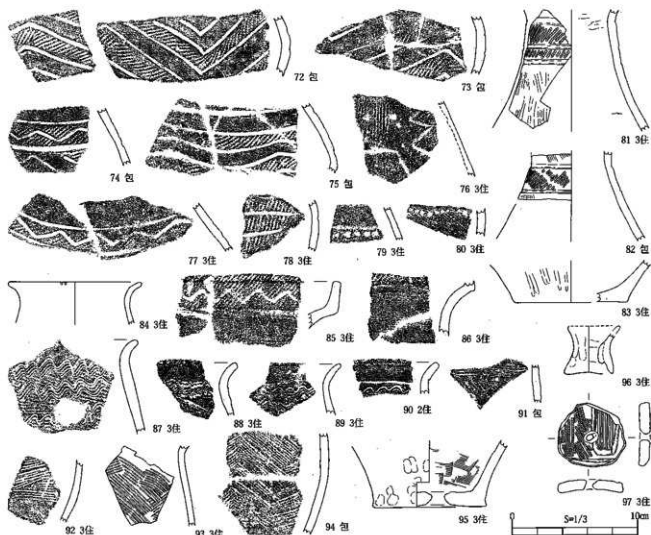
胴部上位: 竇描+櫛描懸垂紋 (76)、その他に胴部上位が確認できるものは81、82であるが、無紋で刷毛目および縦方向磨きが施される。

胴部中位(下位): 竇描山形紋+縄紋 (72・73)、縄紋+竇描横線+竇描山形紋 (74・77)、竇描横線+竇描連弧紋+縄紋 (75)、縄紋+竇描横線 (78)、竇描横線、櫛描波状紋+竇押し引き刺突紋 (79・80) がみられる。縄紋は単節LR横転がしが主体を占めている。

胴部下位から底部にかけては縦方向磨きが施される。

甕形土器 (第8図 84～95)

全体を把握できるものはないが、口縁部は、頸部から短く外反する甕A (84・87～90) と大きく張り出して受口状(翼状)になる甕B2 (85・86) がある。甕Aが多いようである。



第8図 弥生土器・土製品

紋様帯は口唇部、頸部、胴部上位に、裏B2は受口部にも認められ、

口唇部：縄紋(85・88)、刻み(84・90)

受口部：縄紋+篋描山形紋(85)

頸部：胴部と接合できないためかではないが、櫛描波状紋が施されるものがある(88～90)。

胴部上位：櫛描波状紋(87)、櫛描斜条痕(88・91・92)、櫛描羽状条痕(93・94)がみられる。

以上、弥生土器は中期後半の栗林式に相当する。全体を把握できるものがないため詳細は不明であるが、甕形土器の頸部に櫛描波状紋を採用しているものはみられない。胴部紋様帯では羽状条痕が多いようである。また、甕形土器にコの字重ね紋もみられず、栗林式中相におさまると考えられる。

土製品(第8図96・97)

96はミニチュア土器である。端部を欠損するが、範型は椀型口縁高杯と考えられる。杯部と脚部の間は貫通孔があき、内面には穿孔時に粘土を押し出した痕跡を確認できる。内外面ともに粗い撫で調整である。97は土器片加工円盤で、孔を有する。長さ5.1cm、幅5.4cm、最大厚0.85cmで、重量27.9gである。壺形土器の胴部を加工し、両面穿孔を行なう。周縁は粗い撫で調整のみで、研磨は施されていない。紡錘車であろう。

参考文献：長野県埋蔵文化財センター2000「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5-長野市内その5-松原遺跡3」

第3表 掲載土器・陶磁器一覧表

※黒色土器A→黒A、土師器→土師、須恵器→須恵、灰釉陶器→灰釉、○世紀→○Cと省略した

図 No.	出土 遺構	種別	器種	質量 (cm)		残存率	表面調整		色調(外調)		備考	実測 番号	注記
				口径 (つまみ径)	器高		口縁部 外面 底面	外面 内面	外面 内面				
1	1住	黒A	杯か	(13.7)		1/8	口縁部で 内面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-2	1住037	
2	1住	黒A	杯か	(13.8)		1/8	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-1	1住023	
3	1住	黒A	杯A	(8.3)		1/4	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒	底部摩滅	1住-4	1住015	
4	1住	黒A	杯A	(14.6)	(5.8)	4.35	1/4 1/2	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-3	1住034 / 1住002
5	1住	黒A	椀		5.2		完	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-15	1住028
6	1住	土師	杯A	(9.8)			1/8	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-11	1住031
7	1住	土師	杯A	9.9	4.7	2.5	5/8 完	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒	口縁部、内面タール付着	1住-5	1住031 / 1住031
8	1住	土師	杯A	10.25	4.8	2.5	完	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒	外面スス・タール付着	1住-7	1住002
9	1住	土師	杯A	10.4	5.1	1.95	完	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒	内面タール、外面スス・タール付着	1住-8	1住003
10	1住	土師	杯A	10.5	5.3	2.5	完	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒	口縁部スス付着	1住-6	1住001
11	1住	土師	椀か	(12.6)			1/8	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-10	1住021
12	1住	土師	椀	(13.8)			1/8	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-13	1住028
13	1住	土師	椀か	(14.0)			1/8	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒	内面スス付着	1住-16	1住028
14	1住	土師	椀か	(14.4)			1/8	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-17	1住040
15	1住	土師	椀か	(14.6)			1/16	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-18	1住033
16	1住	土師	杯A		5.0		完	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-9	1住029
17	1住	土師	皿Aか	(7.3)			1/2	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒	外面スス付着	1住-19	1住004
18	1住	土師	椀		5.3		完	口縁部で、弱い磨き	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-14	1住007
19	1住	土師	椀	(7.0)			3/8	口縁部で、弱い磨き	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-12	1住032
20	1住	土師	盤A	(23.4)			1/12	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒	内面炭化物付着	1住-20	1住029
21	1住	土師	盤Aか	(24.0)			1/5	口縁部で 底面	口縁部で 外面 底面	黒 黒 黒		1住-21	1住032/037

国	出土	種別	種類	流量 (cm)			残存率	特異調整		色調 (軸頭)		備考	実測	注記
				口径	底径 (つまみ径)	高さ		口部部	内面	外面	外面			
22	1住	土師	盤B		5.2		1/8	回転盤で	黒	黒		試T1-1	試T1	
23	1住	須恵	杯A	(13.8)	(6.2)	3.95	1/8	回転盤で	灰	灰	内外面火傷あり	1住-31	1住025	
24	1住	灰釉	椀		(10.0)		1/2	回転盤で	灰	灰	内面使用痕あり	1住-29	1住032	
25	1住	須恵	短頸甕B				1/6	回転盤で	灰	灰	断面酸化色を呈する	1住-32	1住029	
26	1住	須恵	甕小		(10.0)		1/8	回転盤で	灰	灰		1住-30	1住039	
27	1住	土師	甕B	(19.2)			1/4	刷毛目	刷毛目、指押さえ	刷毛目、指押さえ	外面入ス付着	1住-25	1住027/032	
28	1住	土師	甕B					刷毛目	刷毛目、指押さえ	刷毛目、指押さえ	内面酸化物付着	1住-24	1住015	
29	1住	土師	甕B		(7.0)		1/4	刷毛目、工具磨で	刷毛目、工具磨で	刷毛目、工具磨で		1住-26	1住015 2住057	
30	1住	土師	羽釜					工具磨で	工具磨で	工具磨で		1住-22	1住042	
31	1住	土師	羽釜小					工具磨で	工具磨で	工具磨で		1住-23	1住 005/033/038	
32	1住	土師	羽釜		(12.4)		1/2	工具磨で	工具磨で	工具磨で	内面見込入ス付着	1住-27	1住022	
33	1住	土師	甕D		(24.8)		1/10	工具磨で	工具磨で	工具磨で		1住-28	1住020	
34	2住	黒A	杯A	(11.4)			1/10	回転盤で	黒	黒		2住-2	2住032	
35	2住	黒A	杯A	14.5	7.3	5.5	1/2	回転盤で→下平掘り	回転盤で→下平掘り	回転盤で→下平掘り	断面焼け	2住-3	2住047	
36	2住	黒A	杯A	(15.0)	(7.7)	5.05	1/4	回転盤で→磨き→黒色処理	回転盤で→磨き→黒色処理	回転盤で→磨き→黒色処理		2住-1	2住001/040	
37	2住	土師	杯A	(15.8)			1/36	回転盤で	黒	黒		2住-8	2住004	
38	2住	須恵	杯B	(15.7)			1/6	回転盤で	刷毛目、指押さえ	刷毛目、指押さえ		2住-6	2住003	
39	2住	土師	杯C	(11.0)	(7.0)	3.95	2/5	回転盤で→下平掘り	回転盤で→下平掘り	回転盤で→下平掘り	円型杯、内面焼文	2住-4	2住044/048 059/061	
40	2住	須恵	高甕				1/3	回転盤で	刷毛目	刷毛目		2住-7	2住028	
41	2住	土師	鉢	(15.1)			1/12	回転盤で	刷毛目	刷毛目	片口	2住-14	2住030	
42	2住	土師	鉢	(16.2)			1/3	回転盤で	刷毛目	刷毛目		2住-13	2住029/064	
43	2住	須恵	短頸甕	(19.0)			1/10	回転盤で	刷毛目	刷毛目	口縁部内面自然釉	2住-5	2住061	
44	2住	土師	小型甕B	(14.8)			1/20	刷毛目	刷毛目	刷毛目		2住-9	2住007	
45	2住	土師	甕B	(20.8)			1/6	刷毛目	刷毛目	刷毛目	外面入ス付着	2住-11	1住029 2住055	
46	2住	土師	甕B	(24.5)			1/26	刷毛目	刷毛目	刷毛目		2住-10	2住034/035/ 037/038/063	
47	2住	土師	甕B		(12.4)		1/16	刷毛目	刷毛目	刷毛目		2住-12	2住021～023 025/027/039 053/062/068	
48	3住	須恵	杯蓋B	13.4	2.55	2.8	2/3	回転盤で	刷毛目	刷毛目	蓋おき痕あり	3住-2	3住004/028	
49	3住	須恵	杯蓋B	13.45	2.5	2.6	2/3	回転盤で	刷毛目	刷毛目	蓋おき痕あり、 火傷あり	3住-1	3住008	
50	3住	須恵	杯A		(7.6)		1/3	回転盤で	刷毛目	刷毛目		3住-3	3住020	
51	3住	須恵	杯B	(12.8)	9.4	3.5	2/5	回転盤で	刷毛目	刷毛目		3住-4	3住 007/018/021	
52	3住	須恵	杯B	15.0	10.8	5.95	1/14	回転盤で	刷毛目	刷毛目	外面自然釉	3住-5	3住009	
53	3住	土師	甕	(20.1)			1/11	刷毛目	刷毛目	刷毛目		3住-8	3住012	
54	3住	土師	甕B					刷毛目	刷毛目	刷毛目		3住-6	3住 001/014/020	
55	±1	土師	杯A	9.2	4.3	1.85	1/12	回転盤で	刷毛目	刷毛目	内面朱付着	±1-1	±1 001	
56	±7	灰釉	椀	(13.6)				回転盤で	刷毛目	刷毛目		±7-2	±7	

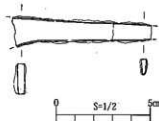
図 No.	出土 遺構	類別	器種	法量 (cm)		残存率 口縁部 底面	器面調整 外面 内面	色澤 (輪郭)	備考	実測 番号	注記	
				口径	底径 (つまみ径)							
57	土7	磁器	碗	(9.4)		1/8 残破	碗縁部で 碗縁部で	灰付、透明釉 灰付、透明釉	瀬戸・美濃産、 19 C前半	土7-1	土7	
58	土12	陶器	小杯	(6.8)	3.35	3.4	1/5 完	碗縁部で、 お転がり、削り出し高台	灰釉 灰釉	瀬戸・美濃産、 17 C後半	土10-1	土10
59	土12	陶器	碗	(7.7)	3.5	6.45	1/2 完	碗縁部で、 碗縁部で、底部お転がり、削り出 し高台	灰付、灰釉 灰釉	瀬戸産、 18 C後半	土10-12-13-1	土10・12 ・13
60	土12	陶器	碗	(8.4)	3.2	6.4	1/2 完	碗縁部で、 碗縁部で	灰付、灰釉 灰釉	瀬戸産、 18 C後半	土10-11-1	土10・11
61	土12	磁器	碗	(10.2)			1/3 残破	碗縁部で 碗縁部で	灰付、透明釉 透明釉	瀬戸・美濃産、 19 C前半	土11-1	土11
62	土12	磁器	碗	(13.8)			1/8 残破	碗縁部で 碗縁部で	灰付、透明釉 灰付、透明釉	瀬戸産、 18 C後半	土9-10-13 3	土9・10 ・13
63	土12	陶器	碗	11.25	4.6	6.7	3/4 完	お転がり、 削り出し高台	灰釉 灰釉	瀬戸・美濃産	土10-2	土10/ 8・9・10
64	土12	陶器	皿	(4.1)			1/3 残破	碗縁部で、 碗縁部で	灰釉 灰釉	京焼肥後陶器、 内底トチン痕あり、 18 C	土9-10-13 2	土9・10 ・13
65	土12	陶器	碗か	(4.6)			3/4 残破	碗縁部で、 碗縁部で	灰釉 灰釉	産地不明、 内底お転がり、 19 C後半	土9-10-13 4	土9・10 ・13
66	土12	陶器	灯明皿	(9.8)	(4.2)	2.05	1/8 1/4	碗縁部で、 碗縁部で	灰釉 灰釉	瀬戸・美濃産、 19 C前半	土11-3	土11
67	土12	陶器	皿	(11.2)			1/6 残破	碗縁部で、 碗縁部で	灰釉 灰釉	瀬戸・美濃産、 17 C	土11-2	土11
68	土12	陶器	鉢	(12.3)			1/4 残破	碗縁部で、 碗縁部で	灰釉 灰釉	肥後産、 18 C中～後半	土9-10-13-1	土9・10 ・13
69	検	土師	杯A	(14.0)	(6.6)	4.7	1/36 1/2	凹縁部で 凹縁部で	灰 灰		検-1	検001
70	検	灰輪	段皿か	8.8	(4.4)	2.0	完 (高台1.2)	凹縁部で	灰	内面に灰付、 使用あり	検-2	検010
71	検	磁器	碗	(7.4)	(3.7)	5.85	3/5 1/2	碗縁部で、 碗縁部で	灰付、透明釉 透明釉	瀬戸・美濃産、 19 C初頭	検-3	検006
72	包含	赤生	壺				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	包-6	包002
73	包含	赤生	壺				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	包-9	包002
74	包含	赤生	壺				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	72-83と同一か	包-7	包002
75	包含	赤生	壺				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	包-8	包003
76	3住	赤生	壺				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	3住-21	3住023
77	3住	赤生	壺				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	3住-12	3住028 / 器002
78	3住	赤生	壺				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	3住-22	3住019
79	3住	赤生	壺				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	3住-24	3住016
80	3住	赤生	壺				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	3住-23	3住019
81	3住	赤生	壺				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	3住-17	3住026 ~ 028
82	包含	赤生	壺				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	包-2	包003
83	包含	赤生	壺	(9.2)			拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	包-1	包002
84	3住	赤生	壺A	(10.6)			拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	3住-7	3住028
85	3住	赤生	壺B2				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	3住-16	3住013 / 015
86	3住	赤生	壺B2				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	3住-13	3住016 / 儀006
87	3住	赤生	壺A				拓形	新毛目→ 新毛目	灰 灰	74-83と同一か	3住-18	3住016

出土 場所	種別	破種	法量 (cm)			残存部 口縁部 基部	断面調整		色調 (軸面)		備考	実測 番号	注記
			口徑	幅径 (つまみ径)	高さ		外側	内側	外側	内側			
88	3住	弥生	裏A			拓影	口縁部周縁上縁部、胴部傘形状状、唇部斜条状、唇部中央部	略縮			3住-14	3住 028	
89	3住	弥生	裏A			拓影	口縁部周縁で、胴部傘形状状	略縮			3住-15	3住 019	
90	2住	弥生	裏A			拓影	口縁部中央部、口縁部周縁で、胴部傘形状状	略縮			2住-15	2住 061	
91	包含	弥生	裏			拓影	唇部斜条状、唇部中央部	略縮			包-4	包 003	
92	3住	弥生	裏			拓影	唇部斜条状、唇部中央部	略縮			3住-20	3住 013	
93	3住	弥生	裏				唇部斜条状、唇部中央部	略縮			3住-19	3住 015	
94	包含	弥生	裏			拓影	唇部斜条状、唇部中央部	略縮			包-5	包 004	
95	3住	弥生	裏	(9.0)		3/10	唇部中央部、唇部中央部	略縮			3住-10	3住 021	
96	3住	弥生	土製品	3.9		完	唇部中央部、唇部中央部	略縮			3住-9	3住 022	
97	3住	弥生	土製品	長さ 5.1 幅 5.4 厚 0.85			唇部中央部、唇部中央部	略縮			3住-11	3住 028	

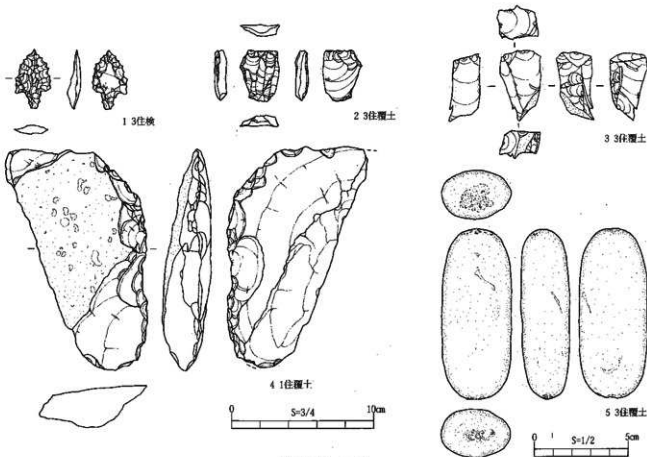
(2) 鉄製品 (第9図)

1住のカマド前の床面直上から刀子が1点出土している。茎部である。残存長で最大長 74.0 mm、最大幅 16.0 mm、最大厚 4.0 mmを測り、重量は 10.6 gである。

木質の付着は確認できない。刃の形態は不明であるが、刃側は緩く湾曲する形状と推測される。



第9図 鉄製品



第10図 石器

(3) 石器 (第10図)

黒曜石の剥片と石核を中心に合計 239 点、総重量 1266.7 g を採集し、このうち 5 点を図化提示した。石材鑑定は森義直氏にご教示いただいた。

石材は黒曜石、砂岩の他に、チャートや珪質泥岩、石英、緑色凝灰岩、粘板岩がある。剥片が主体を占め、2次加工のある剥片や微細剥離がみられる剥片も確認できる。石核も多い。定形的な石器では石鏃 1 点 (第10図1) や楔形石器 8 点、敲石 1 点 (第10図5) がある。

住居址覆土から出土したものが大半を占めるが、弥生包含層からの出土もあり石器の多くは弥生時代に帰属すると考えられる。

第4表 掲載石器一覧表

図No.	出土地点	種類	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
1	3住及び土12上面覆土	石鏃	黒曜石	21	12	3	0.7	有基盤
2	3住覆土(覆下)	剥片	黒曜石	20	10	3	0.6	
3	3住NW	石核	黒曜石	23	14	13	3.1	
4	1住EWベルト覆土	2次加工のある剥片	砂岩	(80)	(48)	13	45.6	打製石斧?折れ
5	3住南側	敲石	砂岩	90	38	26	131.5	押状

IV 総括

今回の沢村遺跡の調査では調査面積が約 150 m² と少なく、集落の中心部や遺構の分布など明らかにできない点が多いが、9世紀前後の竪穴住居址 2 軒 (2・3住)、11世紀後半の竪穴住居址 1 軒 (1住) と土坑・ピットを確認し、以下の調査成果を得た。

1住と2住は入れ子状に重なるが、時期が空くため建て替え等ではない。1住は調査区中央の洪水性砂礫層を切り、11世紀後半以前に女鳥羽川水系の洪水があったことがわかる。これは、古女鳥羽川の流路に関わる問題であるが、9世紀末に洪水があったことは今日までの調査結果からも明らかである。1住は不整長方形を呈し、平安時代後期に増加するコーナーカマドを有している。それに対し、2住は隅丸方形を呈し、東壁のやや南寄りにカマドを構築している。竪穴住居址の基本的プランであり、平安時代前期の特徴であろう。また、床面積が約 9 m² の中型住居であり、該期では主体を占める規模である。今回の調査区では、2・3住と1住の間の6～13期の遺物はほとんど出土していない。

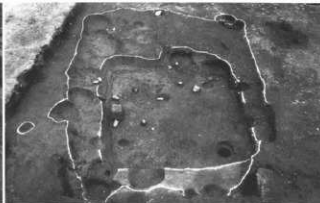
本遺跡周辺には奈良～平安時代の遺跡が多く存在するが、古くから市街化が進んでいるため調査例が少なく、時代、性格等が不明な遺跡が多い。その中で、大門沢川流域では元原、旧射場西、蟻ヶ崎遺跡で発掘調査が行われている。元原遺跡は7世紀末～8世紀前半を主体とし、旧射場西遺跡では7世紀末～10世紀前半、近接する蟻ヶ崎遺跡でも8世紀末～9世紀前半を主体とする集落が確認されている。今回の調査でも9世紀初頭の住居址を確認し、大門沢川流域に8世紀後半～9世紀を中心とした集落が展開していたことがわかる。

また、住居址などは発見されなかったが、弥生時代中期後半の遺物包含層を確認した。土器片の遺存状態も良好なため、周辺に集落の存在を推測できる。城山丘陵周辺では本遺跡と宮渕本村遺跡で石戈、蟻ヶ崎遺跡で磨製石剣や漢式三角鏃、宮渕二つ塚遺跡で銅鐙の鈕の一部が採集・出土しており、特殊遺物の存在が注目される。今回の弥生包含層の確認により、宮渕二つ塚、宮渕本村遺跡が立地する城山丘陵南麓と同様に、大門沢川流域においても弥生中期後半～後期の集落が展開していた可能性が高くなった。

最後に、現地説明会に参加された多数の住民の皆様、調査開始から終了までご支援くださった沢村町会の皆様に感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。



沢村遺跡調査区全景（西から）



1住・2住（西から）



1住 カマド検出状況（東から）



同左 遺物出土状況（北から）



2住 カマド遺物出土状況（北から）



同左 完掘状況（西から）



3住 礎検出状況（西から）



P 21 遺物出土状況（南から）



7



8



9



10



4



22



23



55



35



39



41



42



48



49



51



52



59



60



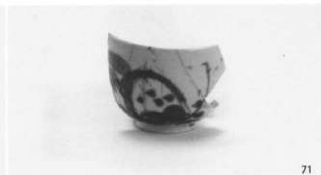
63



68



70



71



58



96



97

沢村遺跡 発掘調査報告書 抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし さむらいせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 沢村遺跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No. 204							
編者名	原田健司、福沢佳典							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒 390-0874 長野県松本市大手 3-8-13 TEL 0263-34-3000 (代) (記録・資料保管：松本市立考古博物館 〒 390-0823 長野県松本市中山 3738-1 TEL 0263-86-4710)							
発行年月日	2010 (平成 22) 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
沢村	長野県 松本市	20202	148	36 度 14 分 45 秒	137 度 58 分 9 秒	20080507 { 20080617	149. 3	市単城北地区 防災緑地整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
沢村	集落址	弥生 奈良 平安	弥生包含層 竪穴住居址 土坑 ピット	3 軒 5 基 16 基	弥生土器・石器 黒色土器 A 土師器 須恵器 灰釉陶器 近世陶磁器 金属製品	奈良時代末と平安時代後期の集落の一部を調査した。住居址は確認できなかったが、弥生包含層の残存を確認し周辺に集落の存在を推測できる。		
要約	<p>沢村遺跡は松本市街地の北西部に位置し、大門沢川と西大門沢川に挟まれた微高地上に立地する。古くより遺跡の存在が知られており、石戈が採集されている。</p> <p>発見された主な遺構は竪穴住居址で、奈良時代末が 2 軒、平安時代後期が 1 軒である。調査区中央には古女烏羽川の洪水性堆積物と考えられる砂礫層が堆積し、1 住が切っている。</p> <p>奈良時代末の 2 住は隅丸方形を呈し、粘土カマドが東壁のほぼ中央にある。平安時代後半の 1 住は不整形長方形を呈し、北西隅に石組のコーナーカマドを有する。西大門沢川をはさんだ対岸に位置する巖ヶ崎遺跡でも同時期の集落が確認されており、大門沢川流域では奈良時代末以降に開発が本格化し、一帯に集落が展開していたと考えられる。</p> <p>また、住居址は発見されなかったが、弥生時代の遺物包含層が一部に残存していた。出土土器は中期後半の栗林式に相当し、土器片の遺存状態も良好である。周辺に石戈との関係が推測される集落が存在している可能性が高い。</p>							

松本市文化財調査報告 No.204

長野県松本市

沢村遺跡

—発掘調査報告書—

発行日 平成 22 年 3 月 31 日

発行 松本市教育委員会

〒 390-0874 長野県松本市大手 3-8-13

印刷 信州印刷株式会社